

ワンが一番の笑い

——奄美の余興笑芸に関する予備的考察——

川 田 牧 人

1. はじめに
2. 「Y-1 グランプリ」とはなにか
 - 2-1 概要
 - 2-2 第6回大会の観察記録
 - 2-3 過去の大会の記録
3. Y-1 をめぐる出来事の流れ
 - 3-1 ライブハウス ASIVI の開業
 - 3-2 サーモン&ガーリックの登場
 - 3-3 「夜ネヤ島ンチュリスペクチュ」の開催
 - 3-4 あまみエフエムの放送開始
4. 予備的考察

1. はじめに

奄美大島・名瀬では、2011年より、余興コンテストである「Y-1 グランプリ」（以下、「グランプリ」を省略することもある）が不定期に開催されている。直近のものは2017年に開催された第6回である。Y-1とは、M-1⁽¹⁾、R-1⁽²⁾などのテレビ番組名を模したネーミングであるが、M-1の「M」が漫才を、R-1の「R」が落語を示しているように、Y-1の「Y」は余興をあらわしている。つまりY-1とは余興コンテストであるということである。Y-1にはもうひとつ、「ワンが一番」という意味もある。奄美方言で第一人称が「ワン」であり、Y-1は、自分が一番おもしろい、という自負の感覚が表現されている。

本稿では、このY-1に焦点をあて、奄美地方における余興笑芸について記録し、若干の予備的考察を加えたい。人びとが何におかしさを感じ、どのような笑いを求め、それに応じてどのような笑いが生成され、どのような交流の場が生まれるのかといった問題は、人間性の追究として深遠な主題をはらんでいると同時に、特定の地域性や時代性を多分に反映していると考えられる。そのような背景からも、笑いを通してある地域の土地柄や社会相をうきほりにすることも可能なのではないだろうか。奄美地方においては、余興は地域文化の典型的な例として考えることもできるが、あまり本質的な見方にとらわれることなく、

むしろ近年、ショー形式のコンテストとして余興があらたな位置づけを得てきたこと、そこで笑芸という形による自己表象の作用がみられることなどについて着目したい。これは Y-1 グランプリが単独でにわかに流行しだしたというよりも、20～30年の時間幅において、さまざまなイベントや文化インフラの拡充とあいまって、共振的に拡がっていった活動として見ることができ、それによって奄美というロケーションを直視してとらえることにもつながるからである。

以上のような前提にもとづき、本稿では Y-1 グランプリについての基本的な記録を記述し、Y-1 をとりまく出来事の流れを時系列に沿ってみていくことにする。そして最後に予備的考察をまとめる。

2. 「Y-1 グランプリ」とはなにか

2-1 概要

奄美の島情報を発信するサイト「あまみつけ。」では、Y-1 について、次のように紹介されている。

「余興」とは、つまりは「宴会芸」のことを指します。奄美では、家族、親戚、友人、知人、先輩後輩など、縦と横でさまざまなつながりがあり、集まる機会も多いです。祝いの場や盛り上がった場面で必ず始まるのが「余興」。あらか

じめ主催者から余興の準備をお願いされることもあるし、突如始まる宴会芸もあります。

そして、特徴的なのは、余興を「真剣に」行うこと。適当ではありません。楽しませたい！ワンが一番！という島人の豊富なサービス精神の現れなのでしょうか。奄美の余興芸は単なるわき役ではなく、時に主役に躍り出るぐらいの一生懸命さで行われるものなのです。

こうした余興芸を集約させ、イベント化したのが、「Y-1 グランプリ」なのです。⁽³⁾

イベント形式の余興コンテストとしては近年始まったものであるが、Y-1 の淵源には人びとが集まる饗宴があり、人びとの生活のなかに余興という楽しみが溶け込んでいたということである。とりわけ直接関連するのは結婚式の披露宴であり、新郎新婦を祝って集まった親戚や友人が順番に演し物を披露して二人を祝福するとともに会場に集まった参加者を楽しませるというならわしである。後にも詳述するが、Y-1 の形式は結婚式の披露宴を模しており、第1回、第2回の大会にはじっさいに新郎和新婦（とその連れ子）を演じる者がおり、彼らが高砂席に座するという実演的な試みもおこなわれていた。

上記サイトにおいて余興を「真剣に」おこなうことが強調されているが、同様のことは、次の「ritokey（離島経済新聞社）」のサイトでも指摘されている。

一般的に余興というと／アイドルグループの曲や振り付けをコピーするだけとか／即興に近い芸をするというパターンが多いですが、／そういった場当たりのなものではなく／微に入り細に入り笑いのエッセンスを加えて脚本をつくり／きちんと練習していることがわかります。／これは大会だからなのではなく、／実際の結婚式においてもそうなのだそうです。また、『Y-1 グランプリ』は、出演者の芸だけではなく／演出や大会運営にも積極的に『笑い』を取り入れています。／たとえばそれは映画『酔拳』を模したポスターだったり／開演前に流れた手づくりのスポンサー CM だったり／奄美出身のアーティスト・元ちとせさんが／さり気なく演出に協力していることだったりするのですが／細部までとても手が込んでいて、私は感動すら覚えました。⁽⁴⁾

奄美島唄のパフォーマーをウタシャと称するのと同じく、余興芸のパフォーマーはエンジャ（演者）と呼ばれる。このエンジャは各シマ（集落）に何人ずつかおり、どこそこ集落の誰という具合にシマをこえて認知されている場合もある。Y-1 が開催されるようになって、これらの有名エンジャたちの認知度はますます高まっており、集落の祝い事などにエンジャが呼ばれて芸を披露することもあるという。したがってこれらの有名なエンジャは、日頃より芸の「仕込み」をおこない練習に事欠かないし、また何人かのエンジャやユニットは演し物がいわゆる

ワンが一番の笑い

「持ちネタ」のようになっているので、それが何度も舞台にかけられ練り込まれたものもある。

「ritokei（離島経済新聞社）」サイトには、以下のような記述もみられる。

元々、奄美大島の結婚式はとても盛大。／ゲストは300名以上というのも当たり前なので／結婚式は会費制がほとんどだそう。／そして、式の運営は同級生や同僚などからなる実行委員が担当するのです。／人と集い、楽しむことが好きなシマッチュにとって／余興は式の中で最も大切な要素。／余興が第3幕まで続くことも珍しくありません。／幼い頃から集落の集まりなどで／劇や歌などの芸を披露する機会が多いこともあり、／シマッチュたちは人を楽しませる術を知っているのでしょう。

奄美群島「本土復帰60周年」を迎える節目の年に／余興という1つの目的で集まった群島のシマッチュたち。／大会の盛況ぶりを目の当たりにして／「余興は奄美の文化」と語る安田さんの言葉に／確かなりアリティーを感じました。／なぜなら彼らは『笑い』を自給自足することができるのだから。／情報に対して受け身になりがちな私にとって／シマッチュたちのクリエイティビティーは眩しく映りました。⁽⁵⁾

島の披露宴が盛大にとりおこなわれ、その中心プログラムのひとつが余興であることは前述の通りであるが、その披露宴はほとんどが「実行委員会形式」でおこなわれるというのが特徴である。この実行委員会の形式が前提としてあったからこそ、余興コンテストをイベントとしてやろうとしたときも、その形式を踏襲して Y-1 実行委員会が組織され、準備が進められていったのである。このような手作り感が上記文中の『『笑い』を自給自足する』という表現にもつながっており、発起人・安田祐樹は筆者のインタビューの中では「地産地〈笑〉」という表現を使っていたが⁽⁶⁾、このことも Y-1 の基本的性格を如実に物語っているといえよう。すなわち、笑いの内容や質に関して奄美独自の基準があるのは当然であるが、笑いの場の作り方や人びとの組織化のプロセスにいたるまで、自前でおこなっているというわけである。ここにも、奄美の地域社会としての特質を読み込むことの可能性が見いだされる。

2-2 第6回大会の観察記録

Y-1 は、結婚式の披露宴や集落における集会で余興芸を披露することによって、祝い事に華を添えたり参加者に楽しみを提供したりするならわしに端を発していること、余興のエンジャはその場限りの一発芸ではなく練り込んだ自慢の芸を披露すること、会の組織化や運営に関しては当事者が自前で主体的に準備しそれを自らが楽しむというスタイルがとられていることな

ワンが一番の笑い

ど、おおまかな輪郭が浮かび上がってきた。そこで次に、筆者が実際に参与観察をおこなった2017年の第6回 Y-1（6月18日開催）の様態を記述しながら、その実施形態についてさらに詳しくみていきたい。

Y-1が開催される会場である奄美観光ホテルは、通称としての「あまかん」のほうが認知度が高い。あまかんは結婚式の披露宴会場として有名であり、披露宴形式を踏襲して演芸大会を開催するにはうってつけの会場だといえる。キャパは500名ほどであるが、開場時間の16時と同時に約100名の観客が入場し、前列から小物やハンカチを置いてあとから来る連れのために席をとりだす。そのあと、腹ごしらえをしたり少しアルコールを入れたりしてくつろいだ雰囲気観覧したいのか、フードコーナーもすぐに客が列をなす。このようなイベントには往々にして特定世代が集まる傾向があるが、Y-1に関してはとりたてて入場客の年齢層にはかたよりが見られず、小学生ぐらいの子どもから60代70代の高齢者まで、幅広い客層が集まっている様子である。公民館の余興大会や集落の寄り合いのような雰囲気ももっており、顔見知り同士がそこかしこで挨拶を交わしている。

進行は表1のタイムスケジュールにしたがって進められる。分刻みで組まれており一見するとタイトなようだが、Y-1の運営にはあまみエフエムのスタッフが入っており、ふだんの放送スケジュールに合わせた進行をおこなうので、むしろこの方が進行しやすいのであろう。エンジャー組の持ち時間は7分間であ

表１：第６回 Y-1 タイムスケジュール

1600	開場～客入れ
1700	オープニング VTR ～生オープニング
1704	司会入場 趣旨説明
1714	乾杯挨拶 大山隆盛様 ～司会一組目ふり
1721	①イカリング隼人（宇検）
1728	幕間
1733	②おい！ハイ！（名瀬）
1740	幕間
1745	③猿興研究学部（古仁屋）
1752	幕間
1757	④東みつひこ（徳之島）
1804	幕間～控室中継
1807	福岡中継
1810	「六調」CM
1814	⑤コシマジック（笠利）
1821	幕間
1826	⑥しゅうじとあきら（大和）
1833	幕間
1838	⑦市役所野球部（名瀬）
1845	幕間
1850	⑧園田エンジェル（名瀬）
1857	幕間～大阪中継

ワンが一番の笑い

1900	「六調」CM2
1904	⑨ワンジー（龍郷）
1911	幕間
1916	⑩パフェーム里志（住用）
1923	幕間
1928	⑪柳家本舗（古仁屋）
1935	幕間
1940	⑫いちごみるく（名瀬）
1947	幕間
1952	⑬さでくまさぶろう（名瀬）
1959	投票説明～投票開始
2000	「六調」CM3
2004	ハト笛講習
2009	福岡・大阪中継
2014	結果発表
2024	六調
2029	万歳
2032	結び
2036	サプライズ VTR
2039	終了

り、多少の伸び縮みは5分間の幕間で司会者によって調整される。

次に、各演目を要約して紹介した表2にしたがって、各演目を詳細に見ていきたい。もっとも、演目の内容は表2に記したので、この本文では笑いのポイントなどについての検討を含めて叙述をすすめたい。

まずエンジャの顔ぶれであるが、笠利・龍郷・名瀬・住用・大和・宇検・瀬戸内（古仁屋）という奄美大島の七地区町村から少なくとも一人は出場できるよう、出演者が調整される。ただし、名瀬は人口に比例して、毎回複数のユニットが出場する。奄美大島以外の他島からも出場するエンジャがいる場合もあり、第6回では徳之島の東みつひこがそうである。このエンジャは、全島大会が試みられ徳之島、喜界島、沖永良部島からも出場者が参加した第3回から毎回出場する常連である。

エンジャにもいわゆる「常連組」がおり、イカリング隼人、ワンジー、パフューム里志、柳家本舗、いちごみるくなどは複数回出場の経験をもつ。この場合、過去のネタをくり返すことは少なく、毎回ネタを替えて披露することが多い。ただし、自分もしくは他のエンジャが特定のエンジャのネタをあえていじる形で焼き直しを演じることがあり、Y-1に何度も通っているコアなファンの笑いを誘うことになる。たとえばトップバッターのイカリング隼人は、「芸人さんのネタをパクる」ことを禁じ手とするという前提の一人コントを披露したが、これはかつて出場したときに、スギちゃんやなかやまきんに君のネタをコピー

ワンが一番の笑い

表2：第6回 Y-1 グランプリ演目リスト
(2017年6月18日開催、会場：あまかん)

	演者	出身	演目内容
1	イカリング隼人	宇検	覆面マスクをかぶって登場した「密売人」という漫才コンビ、しかし相方が逮捕されたとのことで一人で掛け合いを演じる。Y-1 グランプリで芸人さんのネタをバクするという汚名を返上するため、オリジナルネタで勝負しようとして、いくつかのショートコントを披露。「野球拳」というネタでは一人で野球拳をやっけいき、毎回じゃんけんに負けてどんどん脱いでいく。パンツ一丁になったところで覆面とどちらを脱ぐか迷い、パンツに手をかけると中から白ブリーフ。しかしまた次も負け、ついに覆面をとり、「素顔がバレたところで、足を洗わせていただきます」でいったん袖にさがる。そこにニュース速報が入り、「数多くの芸人のネタを盗作した罪で指名手配した男が、先ほど逮捕されました。逮捕されたのは、宇検村に住むイカリング隼人。芸人のネタを本人の許可なく盗作し、数多くの余興に出演していました」でオチをつける。
2	おい！ハイ！	名瀬	舞台後方から女性7人が登場し、ダンスして袖に引っ込むと、かわって女装ゲイ風の3人が登場してコミカルダンスを踊る。いったん暗転し、コント。三人で誉め合ううち、ひとりが龍郷の漫才師とつきあっていることが発覚し、同じ相手だとわかったもう一人と取っ組み合いを始める。すると三人目が仲裁に入り、「世界に玉はいくつあると思ってるの?」「35億玉」(ブルゾンちえみのギャグ)でオチ。キメは「オカマはたまがるほど美しく」「たまがるほど気高く」「たまがるほど強く」でポーズをとって終了。
3	猿興研究学部	古仁屋	高橋洋子「麗しのルフラン」で3人の白塗りが登場。無言のまま芸を進める。会場から観客を一人舞台にあげ、ヘルメットをかぶせて座らせる。その頭をスケボーで飛び越えようとするが、曲の「私に還りなさい」というサビの部分で踊り出し、スカシて飛ばない。客を帰したあと、名ピラをもって再登場。「神の瞬間移動」というネタでは、一人が手錠をかけられ幕で隠され、やはり「私に還りなさい」で幕を下ろすと手錠がとれていると思わせて、ポーズを変えただけ、というスカシ。

			「神のダブルダッチ」では、二本の飛び縄を目隠しした一輪車で通過しようとするが、縄を持つ一人が腹痛を起こし、もたついている間に曲がおわってしまい、一輪車だけが取り残されるというオチ。
4	東みつひこ	徳之島	蛇皮線をもって登場するが、ほとんど弾かずに漫談の合間に一節を引くだけ。前半は徳之島から来たということで、徳之島の説明で半分ぐらいしゃべる（矢沢永吉が島に来た話、覚醒剤が100キロ発見された話など）。後半の漫談は、娘が父の日だからと牛乳を送ってきた話、108キロの友人が言うには100キロプラス消費税で百均デブと言われていたが、先日クアラランブルで亡くなった、その名前はまさお（正男）という話、あるアメリカ人が日本語を勉強して日本に来たとき、公衆トイレで用を足して、紙をとろうとすると、「備え付けの紙以外は流さないで下さい」と書かれていて困惑した話、散髪屋に行くとバーバーなのにじいさんがいたという話、米軍基地が徳之島に移設されそうになったとき、反対運動の看板に「長寿の島に墓地はいらない」と書かれていた話、でオチ。
5	コシマジック	笠利	BEGIN「島人の宝」、大黒摩季「LA・LA・LA」に合わせて、カードや花を出したり、破いた新聞紙が元に戻るといったマジックを次々と披露していく。脇に立っている助手がほとんど何もせず、ときおり手を振って上半身だけでやる気なさそうに踊ったり、取り出されたジャケットを着て旗を振るといった動作が笑いを誘う。
6	しゅうじとあきら	大和	客を舞台にあげ、思い込みと錯覚による裏切りの笑いを生む芸。一組目男女ペアは、男性に立て膝で右手を前に突き出させ、そこに置いた紙風船を女性が持つビコビコハンマーで叩くよう指示し、実際に叩く寸前でとめる。今度は両方目隠しし、同じ動作をさせるが、男性の手には結婚指輪の箱、女性はマルバツ指示器で、安室奈美恵「Can You Celebrate?」がかかりマルバツを迫る。二組目の男女はしゅうじとあきらの片方と合わせて三人ならび、コップにビールを注がれる。バンダナで隠しているあいだに飲むように一人目、二人目と進んでいき、三人目の男性客の番になると、一瞬のうちにバンダナをはずしてしまう。三人目は女性一人で登壇させ、腕にストッキングをつけて、

			チャンネルズ「ランナウェイ」に合わせて手踊り。女性のストッキングを今度はトイレットペーパーにもちかえて、しゅうじとあきらの一人が便座の形を作り、もう一人がしゃがみ、女性の持つペーパーを使ってトイレを演じる、でオチ。
7	市役所野球部	名瀬	無言野球コント。2020年プロアマ対抗戦決勝、横浜 DeNA ベイスターズ対奄美市役所野球部、9 回表おわって 3-0 で横浜リード、9 回裏の攻撃 2 アウト満塁 2 ストライク 2 ボールという設定で、ホイットニー・ヒューストン「Always Love You」に合わせてスローモーションでピッチャーが投球し、ちょうど歌詞の「And I (will always love you)」のタイミングでホームラン性のあたりとなり、一同いっせいに球の行方を目で追う。最初はファールで、二回目はバットが回りかけるが振り切っていなかったとのことでボール 3 となり、最後の「And I...」での打球に対し、球審河村はホームランを宣告。最後は「続きは Web で。河村 Y-1 誤審」という検索バー状の横断幕が出てオチ。
8	園田エンジェル (第 3 位)	名瀬	3 人組の女子中学生コント。二人がすわって待っているとトイレから帰ってきた主人公が登場し、「俺はとんでもないことをしてしまった。殺してしまったんだ。ゴキブリを」と白状し出す。二人のうち一人が主人公のボケにつきあいだし、もう一人はツッコミ役へ。ボケに回った友人いわく、「小島いいか落ち着くんだ。あいつを憎んでるのは、お前だけじゃない。あいつは誰からも嫌われていた。たとえるなら、そう、ゴキブリみたいなやつだった」、「いやゴキブリなんだよ、何言ってるのあんた」。友人の機転で「ゴキブリは殺されたんじゃない…自殺したんだ」ということにしようと相談がまとまり、最後は唐突に「涙の数だけ強くなれるよ アスファルトに咲く花のように 見るものすべてにおびえないで 明日は来るよ 君のために」と岡本真夜「TOMORROW」を歌い踊る。(途中、小島役はセリフが飛んで立ち往生するが、そのときのセリフ「冷静に考えろ」、「お前、自分が今なに言ってるのかわかってんのか」など、状況にピッタリすぎて大爆笑をさそったが、天然か計算かわからない。)

9	ワンジー	龍郷	6回皆勤の島グチ漫才。出身地の龍郷町の自慢のあと、島唄「いきゅんにゃかな」の歌詞でボケるネタ。「いきゅんにゃかな」のあとのセリフは何だった、というネタ振りに対して、ボケが「タネオロシ忘れて」「タネオロシは忘れらん。三日前から放送がある」、「きゅうだか屋仁川」「きぬだか…あさ…」「週に三日も屋仁川行ってどんなするわけ」、「この世からあの世に」「命がいくらあっても足りんわ」、などボケを連発し、「わきゃこと忘れて とりが」と、もう少しで完成するところで貝拾いに行く。さいごは「わきゃこと忘れて いきゅにゃかぬー」でサゲ。
10	パフューム里志	住用	いつものように着衣を脱いで丁寧にたたむところからスタート。Perfume「シークレットシークレット」、「ワンルームディスコ」、「Dream Fighter」を完コピで踊る。いったん退場のあと、いつものとおり仕込みのアンコールで再登場。Beyoncé「Crazy In Love」を踊る。
11	柳家本舗	古仁屋	柳家本舗ジュニアとしていろいろな面をつけたジュニアメンバーが並んでダンスをしたあと、バット折り、コーラ一気飲み、瞬間移動（メンバーの入った箱を突き刺し、移動できていれば無事のはずが、頭に突き刺さったまま出てくる）などのイリュージョンショーを披露する。
12	いちごみるく (第2位)	名瀬	ドラえもん登場。お友達を呼んでいるといって登場したのは、ゴミ袋をたくさん持ったドラえもん。四次元ポケットがこわれて、全部持ち歩いている。二人の会話。怪我をした黒ウサギを見つけて病院に連れて行こうとタケコプターをつけたとたん、どこかへ飛んでいったといった話。そこへ「お前ら、何やってんだ」という声。ジャイアンかと思いきや、三人目のドラえもん登場。家のまわりでカラスがうるさいので、空気銃をぶっ放してよくみると、タケコプターをつけた黒ウサギだったんだ。ひどいよ、それは僕が助けた黒ウサギだよ。そのあと、四次元ポケットからアイテムを出して競うことになるが、ティッシュばかりがでてくるドラえもん、こわれているのでゴミ袋からただの懐中電灯（スモールライトにみせかける）を出すドラえもんなど、三人目は縫い付けであってアイテムを取り出せない。さいごは、転がるボールに飛びつこうとする猫型ロボットだったというオチ。

ワンが一番の笑い

13	さでくまさぶろう (優勝)	名瀬	上佐大熊出身のキャラクターが、佐大熊に関連した替え歌を披露するネタ。「サンタル熊」、「帰れアフリカへ」などを熱唱したあと、佐大熊ニュースを発表（郵便局前の信号が点滅式になった）。最後の曲は「消臭力」。会場の右佐大熊「さでくまみんな大好き」左佐大熊「さでくま僕も好き」後ろ佐大熊「さでくまにみんなで作ろう」などを合唱し、さいご会場全体で「消臭力」と叫ぶ。
----	------------------	----	--

した演し物を披露したことをあえて「自己言及」する笑いといえるかもしれない。

テレビを通したお笑い芸の仕込みは Y-1 でもよく見られ、次の2番手のおい！ハイ！のネタも、当時はやっていたブルゾンちえみの「35億」のギャグをアレンジして用いている。ただしこのネタで、二人のケンカの原因になるのが「龍郷の漫才師」であり、これはおそらく Y-1 常連組であるワンジーのことを引き合いに出すことによって「親近感」にもとづく笑いを生み出している。

3番手の猿興研究学部は、常連とはいわないまでも何度か出場したことがあるが、そのたびごとに演し物は替わるものの、基本コンセプトは「スカシ」という笑いの手法を取り入れ、それを音ネタとしても応用している。過去に見た演目では、客席から一人を選んで大きな捕虫網のようなものを構えさせ、舞台からボールを蹴り入れるふりをしながら、曲のサビの部分でボールの横にたって踊り出す（蹴りそうで蹴らない）というネタだった。

4番手の東みつひこは先にも記したとおり、徳之島からの参加である。彼は落語形式で座ってしゃべることもあるが、今回は蛇皮線をもって登場し、一つ小咄が終わるたびにワンフレーズを弾くギター漫談やウクレレ漫談のような形式でおこなわれた。話のネタは島特有のものというより全国どこでも通用するジョークのようなものだが、最後の米軍基地が徳之島に移設されかけたというネタは、徳之島でじっさいにあった話を素材にしており、こういうネタが徳之島でじっさいにおもしろおかしく語られていたことを彷彿とさせるようなネタであった。いわゆる「日常の語り」のおかしさである。Y-1のネタは、このように、身近な日常生活のなかから素材を見つけ、それをパフォーマンスとして練り上げられたものも少なからずある。

次のコシマジックは、お笑いというより純粹にマジック（手品）を高速スピードで連続的に演じていく芸であるが、横に立っている助手がほとんど何もせず、上げた両腕を横にふってリズムをとったり、マジックで取り出されたジャケットを着たり旗を振ったりするやる気のなさそうな態度が笑いを誘う。コシマジック自身のハイスピードと対照的であり、その「コントラスト」が笑いの起爆剤となっているようだ。

6番手のしゅうじとあきらも客イジリをするという点では猿興研究学部と少し似ているが、猿興研究学部の基本コンセプトがスカシであったのに対し、しゅうじとあきは「思い込み」と「錯覚」を利用した笑いを生み出している。最初のネタは手のひ

ワンが一番の笑い

らに載せた紙風船を割る姿勢と結婚指輪を差し出す姿勢が同じであることから思い込みを生じさせ、次のネタはコップに注がれたビールを飲むときはバンダナで隠すという思い込みを作っておいて三人目でそれを崩して裏切りの笑いを起こす。この演目は奄美限定ではなく、全国共通の笑いであるといえる。

次の市役所野球部のネタも、奄美にかぎらずどこで演じてもうけるであろうネタである。ホイットニー・ヒューストンの曲に合わせて野球試合がスローモーションで演じられ、曲のクライマックス部分でホームラン性のあたりを全員が目で追って音楽とシンクロさせた動きをするように計算された野球コントである。あるいは曲に合わせた無言コントの進行がなされるという点では、「音ネタ」、「シンクロネタ」といってもいいかもしれない。ただしクライマックスでホームランを打つというのは予想できることなので、毎回ジェスチャーをかえること、そして最終的には球審の誤審だったことをパソコンの検索画面を模した横断幕で示してオチとするなど、ひとひねり効かしてあるところがミソである。

8番手の園田エンジェルは現役中学生だとのことで、若年層からの参加は大会初だそうである。観客の年齢層はまんべんなく広がっているが、エンジャにおいても若者からお年寄りまでが参加することは、奄美における余興の裾野の広さを物語っている。演目そのものはゴキブリを殺してしまった主人公をかばって無罪を主張する友人 A と、ツッコミ役にまわって主人公と A

のボケをフォローしていく友人Bというふうに役割分担をキッチリ設けている。三人がけっこう演技慣れしているあたりは、中学・高校の文化祭や予餞会などでも余興芸が演じられていることを示唆している。もっとも、演技中に主人公が緊張のあまり、セリフがとんでしまう場面もあったが、この部分の主人公の「冷静に考えろ」、「自分が何言ってるのかわかってんのか」といったセリフと妙に状況が合致しており、「天然」か「計算」かわからない。また岡本真夜「TOMORROW」の一節を急に歌い出すあたりは脈絡がなく、「シュール」な笑い要素も含まれている。

後半、9組目からはY-1常連のオンパレードである。ワンジーは龍郷のチームTEPPANから派生した漫才コンビであり、おい！ハイ！のネタでもいじられていたように、比較的名が通ったエンジャである。多数の漫才ネタをもっているようであるが、今回は非常に有名な「行きゅんにゃ加那」（「行きゅんにゃ加那節」ともいう）の歌詞でボケるという、島グチ漫才の真骨頂のようなネタである。オリジナルの歌詞は、以下の通りである。

行きゅんにゃ加那
吾きや事忘れて 行きゅんにゃ加那
打っ発ちゃ 打っ発ちゃが 行き苦しや
ソラ行き苦しや

二
九
二

この、「行きゅんにゃ加那」の後の部分を入れ替えてボケていく

ワンが一番の笑い

のである。形式としてはボケとツッコミがハッキリ分かれる典型的な「しゃべくり漫才」のスタイルであるが、その内容に奄美の独自性を色濃く反映させている。

パフューム里志は第1回から同じスタイルで、着ている物を脱いでキレイにたたみ、海パン一丁になったところで振りつけダンスをスタートする。この芸の笑いポイントは、女性アイドルの曲の振りつけを中年男性がしかも海パン一丁で完全コピーするという「ミスマッチ」にあるようだ。芸名どおり女性三人組ユニット Perfume の曲を中心に完コピするのだが、毎回、曲目は変えており、きゃりーぱみゅぱみゅなどもレパートリーに入っているようだ。3曲を踊り、いったん袖に下がった後、アンコールがかかるというのもお定まりで、アンコール曲は外国人シンガーの曲が選ばれることが多い。今回は Beyoncé であった。パフューム里志は Y-1 を代表するエンジャのひとりで、スポンサーとなった奄美伝承蔵・渡酒造株式会社の商品「六調」のCMが会場で流されたのだが、そのCMにも出演していた。

柳家本舗は瀬戸内町古仁屋に拠点をおくユニットで、年齢構成は多様である。毎回こったネタを披露するが、今回は「いちごみるくに優勝を持って行かれた」ことの雪辱を果たすため、ジュニアメンバーを率いての出場である。演じるのは、バット折り、コーラー気飲み、瞬間移動など体をはった芸であった。毎回ネタを工夫してコント風であったりイリュージョン・ショーであったりと趣向を凝らすあたり、そしてチームに多くのメン

バーを取り揃え賑やかであるあたり、「バラエティ」という語に近い笑いを提供している。

いちごみるくが柳家本舗にライバル視されるのは、第6回の4年前、第3回大会において優勝をかつさらったからだという。そのいちごみるくは3人のユニットであるが、3人とも同じキャラクターに扮し、冗談話を交わすというスタイルである。今回は3人のドラえもんである。最初にドラえもんが登場し、「友だちを紹介する」というと、のび太が登場するかと思いきやドラえもん、不気味な音楽とともに「お前ら何やってんだ」と威嚇的な声がするとジャイアンかと思いきやまたもやドラえもん、という「キャラかぶり」となる。そして3人で四次元ポケットからとりだすアイテムで競い合う。笑いのポイントとしては「不条理コント」に近いのかもしれないが、3人の会話は友だち同士がだべっている「軽口」のような部分もある。

最後のさでくまぶろうは、サーモン&ガーリックの一人、城平一が扮するキャラクターで、名瀬市の佐大熊地区に住むという設定である。この佐大熊を奄美方言では「さでくま」というのだが、佐大熊の話題での漫談、そして佐大熊をあつかった替え歌熱唱で、会場が異常に盛り上がる。最後は消臭力のCMのパロディを合唱指導し、「さでくまみんな大好き」「さでくま僕も好き」「さでくまにみんなで住もう」「消臭力」と会場全体で声を合わせるといった趣向であった。佐大熊地区の微妙な位置づけは島外者にはなかなかわからないが、島民はまさにツボにはまったという感じ

ワンが一番の笑い

で沸くこのネタは、「楽屋おち」と形容するのが一番近いかもしれない。あるいは「お馴染みあるある」の笑いともいえよう。

全演目が終了すると、投票用紙の回収がおこなわれ、会場でハト笛講習や大阪・福岡との中継がおこなわれている間に集計がなされ、結果発表となる。第3位は園田エンジェル、第2位はいちごみるく、優勝はさでくまさぶろうであった。

以上、第6回 Y-1 グランプリを例に、その演し物の内容と性格づけについて検討した。笑いのポイントとして、「自己言及（自虐）」、「親近感」、「スカシ」、「日常の語り」、「コントラスト」、「思い込みと錯覚」、「音とシンクロ」、「天然と計算」、「しゃべくり（典型的ボケとツッコミ）」、「ミスマッチ」、「バラエティ」、「不条理な軽口」、「楽屋おち」と、多種多様な要因が見いだされ、エンジャ同士で調整したわけではないだろうがあまり重複がみられないのも一つの特徴として指摘できる。この「かぶりがない」ことが、長時間の演芸大会であっても間延びや中だるみがまったくなく、会場全体がハイテンションのまま長時間楽しみが持続する拠ともなっている。

2-3 過去の大会の記録

筆者が Y-1 グランプリをじっさいに観察できたのはこの第6回だけであり⁽⁷⁾、過去の情報は現在でも調査中の部分もある。そのうち第1回（2011年6月12日開催）と第2回（2011年12月30日開催）については、主催者の安田祐樹が所蔵するDVD映像に

よって確認することができる。それを第6回同様に演目内容として一覧表化したのが、表3（第1回大会）と表4（第2回大会）である、以下、これを参照しながら前項同様の検討を加えたい。

第1回と第2回が現在の大会の形態ともっとも大きく違っているのは、じっさいに新郎新婦が座る高砂席が設けられ、そこに新郎新婦役の男女（とご丁寧にも新婦の連れ子という設定のキャラクターまで）がじっさいに出席するという、結婚式披露宴を擬似的に再現するという趣向が施されていることである。この新郎新婦とその連れ子、媒酌人などは実際には審査員をつとめており、高砂席を模したものは審査員席であった。そして開演時には祝いの島唄が演奏されたり、全演目が終了して審査投票の開票結果を待っている間に新郎新婦によるお礼のご挨拶があったりと、披露宴を反映させた式次第となっていた。この新郎新婦役は第3回あたりからマネキン人形にかわり会場の片隅に設置されるだけとなったが、それでも結婚式披露宴という形式の名残として確認できた。また第1回と第2回では「しょかくやちとせ」⁽⁸⁾の変名で元ちとせが参加しており、第1回では高砂席に座り、第2回では「天の声」として放送で音声だけが流れる形での参加ながら、会場に彩りを添えていた。

第1回と第2回の大きな違いは会場であり、第1回がライブハウス ASIVI であったのに対し、第2回からはあまかん（奄美観光ホテル）に移っていることである。あまかんでの開催は第2回以降、第6回まで継続して行われている。これは先にも記

したとおり、奄美大島で結婚式披露宴といえばあまかんといわれるほどに象徴的な会場であるからであり、披露宴の余興芸能大会という Y-1 の基本的性格を会場からして演出するのに最適であるといえる。また ASIVI はキャパとしても200人がせいぜいであるが、あまかんなら500人収容可能である。第1回の開催以来たいへんな人気を博し、前売券が発売されると数日で完売となってしまうという大盛況の芸能大会であるので、なるべく多くの観客を収容できるスペースの方が理想的なのである。

その他の違いは出場エンジャの数である。第1回は9組出場したのに対し、第2回は12組を数え、この回以降、12組ないし13組で構成されるようになった。最初は試行錯誤的なところの多かった Y-1 も、第2回から会場や番組構成において基本的フォーマットができあがり、それが以後の回にも踏襲されるようになっていったということである。

演し物の内容についてであるが、表3に示した第1回 Y-1 の演目リストによると、やはり結婚式披露宴の引力圏内の演し物が多く、新郎もしくは新婦の友人代表のあいさつという体を取りながら、そこで面白おかしい話をしたりそこからダンスなどのパフォーマンスに入っていくというパターンが約半分を占めている（元田豊春達、ブーブーシスターズ、シゲとゆかいな仲間たち、柳家本舗、マチャコ・デラックスなど）。そのほか、イカリング隼人はアイドル歌手の解散コンサートを演じて「見立て」の笑いを提供し、サーモン&ガーリックはあえて葬式のシ

表3：第1回 Y-1 グランプリ演目リスト

(2011年6月12日開催、会場：ASIVI)

	演者	出身	演目内容
1	イカリング隼人	宇検	光隼人というハゲのアイドルが、光 GENJI の「ガラスの十代」の替え歌や、「パラダイス奄美」などを披露する。デビューコンサートの体で進めていくが、じつは解散コンサートだったというオチ。ステージで使っていた三輪車を舞台に置いていき、「こうして光隼人は伝説のアイドルとなった」。
2	元田豊春達	大和	披露宴の友人代表挨拶の録音を流しながら、「いっしょにやった理不尽ゲーム」のところで豆鉄砲をうったり、「アンメルツを塗ってくれた」ところでじっさいに顔にアンメルツをぬったり、「風邪を引いたときに野菜ジュースにタバスコを入れて飲ましてくれた」というところで、じっさいにタバスコ入りの野菜ジュースをのんだり、「失恋してぐれていたときにビンタしてくれた」というところでビンタしまくるなど、体当たり芸を連続する。さいごは自作の歌で新郎をほめたたえる。
3	ブーブーシスターズ	名瀬	安室奈美恵の「キャンユーセレブレイト」で入場した新婦友人代表の体で、姉の聖子が新婚生活で困ったことを妹のダイ子が答えるという形式で新婦へアドバイスする。料理がたいへんな場合にシリコン鍋、就寝時の鼾とおならにクリップと耳栓、親戚問題にはスマイル。最後は松田聖子や AKB、小泉今日子などのメドレーで踊りまくる。
4	シゲとゆかいな仲間たち (第3位)	笠利	Queen の We will Rock You で登場。ブラックスーツで渋く登場した男性が、いきなりハイレグ水着姿となり、武富士の CM で使用されていた「Synchronized Love」でフィットネスダンスを踊る。新郎への挨拶のパロディの後、ジブシーキングスの「Volare」でふたたび踊り出す。最後は舞台だけでなく、会場中を踊り回る。
5	サーモン＆ガーリック	名瀬	葬式の場面。サーモン＆ガーリックの新元一文と城平一の遺影。読経に合わせて、登場したこの二人が踊りまくる。

ワンが一番の笑い

6	柳家本舗	古仁屋	結婚披露宴にかけつけた中国人女優と瀬戸内町団地に住むおっさん。女優は何を聞かれても、自分の名前である「チャン・ツイー」としか答えない。それを長ったらしい翻訳で説明するおっさんの神田川さん。演し物である「男と女のラブゲーム」は一瞬でおわる。
7	パフューム里志 (優勝)	住用	着ていた服をキッチンとたたみ海パン一丁になり、「レーザービーム」、「チョコレイト・ディスク」、「ポリリズム」のパフューム・ナンバーを完コピで踊る。(たぶん仕込みだが) アンコールがかかり、舞台に戻ったあと、KARA「ミスター」も踊る。
8	マチャコ・デ ラックス	名瀬	新婦友人の体で、お祝いの言葉を述べる。長崎から傷心旅行で奄美を訪れ、新婦と出会ったくたりは割とマジにスピーチするのだが、後半、あのHUMPTYの「飲み過ぎんなよ～Yaaaah パパバイ～」を踊りまくる。
9	チームTEPPAN (第2位)	龍郷	ワンジーによる島グチ漫才。じいちゃんと若者のコンビで、じいちゃんは何かあるとすぐに栄養ドリンクを渡そうとする。じいちゃんはボケなのだが、しゃべらず、ツッコミではじめてボケがわかる、というけっこう高度なもの。じいちゃんが畑仕事でドラゴンボールをみつければところまでは漫才で、その後は映像となり、じいちゃんのドラゴンボールで6つまで集めた仲間のタスクが、あと1個をめぐって悪人(わるひと)との対決の場面で、ふたたび舞台へ。しかし二人とも新郎新婦のためにドラゴンボールを集めていたことがわかり、和解しかけたところへ最初のワンジーが登場し、7つのドラゴンボールを持ち去って願いをかなえようとする。じいちゃんの願いは、畑仕事の時に聞くラジオを新しいものにする、というオチ。

チュエーションで遺体が踊り出すという「ナンセンス」な笑いを引き起こす。パフューム里志の海パン完コピ振りつけ芸はこの第1回で優勝することによって知名度が上がり、ワンジーもチームTEPPANのユニット内でのしゃべくり漫才を披露してい

る。要するに、必ずしも披露宴で新郎新婦に向けられたものというより、より笑いの志向性をもつ演し物を披露するエンジャたちは、第1回にしてすでにセミプロ化するポテンシャルを秘めていたということができよう⁽⁹⁾。

第2回の演目は表4にリスト化されている。注目されるのは、第1回が開催されたその半年後には、もう第2回が開催されていることである。これは第3回以降、1年から2年の間隔をあけて不定期に開催されていることを考えると、かなりのハイペースである。最初は定着するまでたたみかけるように世間に周知しなかったという側面もあるかもしれないが、第1回の反響が大きく、次もすぐに開催してほしいといった待望の声があったからかもしれない。第2回にも新郎新婦を演じる審査員が参加するという点では第1回と同じだが、余興コンテストとしての内容の充実化が図られている。先に記したとおり、第1回では新郎新婦への祝福のメッセージでウケをとるといった、実際の披露宴でおこなわれているそのままの演し物が約半数を占めた。それは主催者が結婚式披露宴で見いだしたエンジャをそのまま引き抜いてY-1への出場依頼をおこなったからだともいえる。しかし第2回以降、新郎新婦へのメッセージという形態は少しずつ後退し、むしろコンテストとしてのY-1で「ワンが一番」を証明するため、作り込んだ演し物を披露するというスタイルへとシフトしていつていることが関連しているであろう。

演目内容の検討については、実際に自分も参加したものでは

ワンが一番の笑い

表4：第2回 Y-1 グランプリ演目リスト

(2011年12月30日開催、会場：あまかん)

	演者	出身	演目内容
1	地球防衛軍	瀬戸内	アンパンマンとメバチコ太郎の漫才。しかしアンパンマンは人形で、掛け合い風ひとり漫談。ワクチンマンでもないのにばい菌マンと戦えるのかとか、水に弱いっていうのは弱すぎるとか、アンパンマンのネタいじりのほか、きんさんぎんさんとは菅井さんと前田吟のことだ、といった小ネタの積み重ねで、大きなドカンとした笑いはないが、子どもにも親しみやすいネタ。
2	ゆわんが MAN	大和	白と赤を混ぜてピンク色のカクテルをつくるといって、白絵の具と赤絵の具を水に溶き、それを飲んでしまう。ついでにタバスコも直飲みしてしまう。つづいて祝舞として、「禁」と書かれた紅白のプラカードで股間を隠しながら全裸で踊る、と見せかけて、股間には紙が貼り付けてある。最後は尻からヘリウムガスを入れて声を変えておめでとうと言おうとするが、成功せず、口から直にガスを入れるが、やはり声は変わらないというオチ。
3	ブー ブー シスターズ	名瀬	「ばっけ道」と書かれた垂れ幕。その大奥につかえるマル子とダイ子が登場。この二人が男を陥れる技の書を紹介し、ダイ子（じつは男性）が「瞳を上目遣いに愛らしく微笑む」、「きゃ、おやめください」と一度は断ること、カラオケを意中の男性に近づいて振りつけ付きで歌うこと、などを実践していく。マル子が歌う山口百恵「プレイバック・パート2」「横須賀ストーリー」に合わせて、ダイ子が踊る。
4	フレディ・ワン チューリー (あまかん賞)	名瀬	フレディ・マーキュリーのモノマネ。「We will Rock You」のリズムをとったあと、「ボヘミアン・ラブソディ」をシンセサイザーで独演する。わりとマジなキーボード弾き語りだが、多重録音を独唱でコピーしていくのはけっこうな芸である。
5	イカリング隼人 (しょかくやちとせ賞)	宇検	「おかあさんといっしょ」のパロディ。「パジャマでおじゃま」にあわせて舞台で着替えをする。男性ブラなどのくすぐりのあと、出てきたのはおじいさん。「はみがきクチュクチュ」に合わせて入れ

			歯をとってみづくろいをし、「仕上げはおかあさん」のところで遺影に手を合わせる。最後は体操。
6	がむしゃら	笠利	カサリンチュ「やめられない止まらない」に合わせ、地球に隕石が激突するXデーにそなえるがむしゃらのメンバーたち。メンバーのうち一人が宇宙へ飛んで隕石をとめることになる。道路交通案内の要領で隕石を逸らせ、地球を守り切った4人があまかんへ向かう。ここまでは映像作品だが、会場の後ろの扉が開いて4人が会場に到着。舞台上でSUPER GIRLS「がんばって青春」に合わせてオタ芸調で踊りまくる。
7	だんしんぐ	名瀬	ステイーブ・上手によるスライドショーを用いながらの漫談。ステーブ・ジョブス仕込みの演説術で、ジーンズの小さいポケットは何のためにある？などの小ネタをはさみながら、「芸能」を「芸事」と「余興」のふたつにわけ、その違いを論じる。「芸事」は良質・賢い・上品・文化であり、「余興」とは勢い・下品・下ネタ・エロ・アホである、と論じるあいだに音響がちよいちょい「ポリリズム」(Perfume)をはさむ。余興の例としてパフューム里志のスライドを提示したところで、だんしんぐ自身も第1回のパフューム里志のように着ている服を脱いでたたみ、さいごは北島三郎「炎の男」をパフューム里志のスタイルで歌い踊る。(演者はサモガリの新元一文か?)
8	チーム TEPPAN	龍郷	豊年祭のときのヨイヤーの踊り集団を解散することになったチーム TEPPAN。ワンジーが独立して漫才をし、じいちゃん和若者もののネタ。基本は第1回と同じ構成で、あまかんを奄美カントリークラブと取り違えるギャグや、パフューム里志いじりなどで、ばあちゃんが大掃除するからじいちゃんを連れて帰ってこいといわれてた、というサゲで退場。次に登場したチーム TEPPAN さいごの二人残ったメンバーのもとに、ふたたびみんながあつまり、ヨイヤーを再び始める。さいごにばあちゃんに扮するメンバーが登場し、しめる。
9	いちごみるく (第3位:61票)	名瀬	フレディ・マーキュリーが3人登場して、島の物知り大会「ホノホシ海岸の石はなぜ丸い?」「俺の母ちゃんが、毎晩磨いている。」「あやまる岬の名前の由来しってる?」「俺も知らん。」「奄美大島はなぜ北東に曲がってるか知ってる?」「本土に向

ワンが一番の笑い

			かってデューン！」。「先日でかいハブを捕まえた。高く売れた。三億円」。「黒糖焼酎を全国に広めたのは、俺といたら…過言です」。「アミノクロウサギって、なんでアミノクロウサギって言うか知ってる？」「知ってる」。「大島紬でほしいのがあった」、「いくら？」、「600円」など、くだらないジョークを畳みかけていく。
10	さでくまさぶろう (優勝：108票)	名瀬	佐大熊地区にすむという設定のさでくまさぶろうというキャラが、年末年忘れ歌唱ショーを開催する。「上佐大熊に生まれて」を「千の風になって」の替え歌で歌う。「ツバシャをください」(ツバシャ(つわぶき)売りを下敷きにした替え歌)、「帰れアフリカへ」(アフリカマイマイの奄美繁殖を前提にした替え歌)、「消臭力」(会場を右佐大熊、左佐大熊、後ろ佐大熊にわけて合唱に巻き込む)、などの歌ネタ。
11	MIZATOO	住用	郷ひろみ「GOLD FINGER 99」に合わせて禪一丁になった演者に対し、「アチチアチ」のところで本当にチャッカマンで火をつける。青江三奈「伊勢佐木町ブルース」ではゴムポンプつきラッパ(エアホーン？ パフパフラッパ？)を尻にはさんでプップッと音を出しながら歌う。さいごは坂本冬美「夜桜お七」を男女ペアで踊る。
12	パフューム里志 (第2位：78票)	住用	今回はガウンを丁寧にたたむところからスタート。海パン一丁になったパフューム里志が踊るのは、ピンクレディ「UFO」、モーニング娘。「LOVE レボリューション」、AKB48「ヘビーローテーション」、Perfume「ポリリズム」のメドレー。仕込みのアンコールで、Lady Gaga「Poker Face」を踊る。

なく DVD によったので、ごく簡単にふれておく。最初の地球防衛軍は、アンパンマンの人形を相方に見立てた「ひとり漫才」である。内容はアニメ「アンパンマン」のネタいじりをはじめとして、アンパンマンに必ずしもとらわれない「くすぐり」的な

短い笑話を積み重ねていくタイプの演目であった。2番手のゆわんがMANは自分で自分に対する「ムチャぶり」で追い込んでいくネタと、とにかく明るい安村やアキラ100%のように一瞬全裸かと思わせてじつはそうではないという形で緊張と緩和⁽¹⁰⁾をもたらす「脱ぎ芸」である。3番手のブーブーシスターズは第1回につづき二度目の出場であるが、前回の披露宴の挨拶ネタをひろげ、一般に男性うけのよい女性のしぐさをダイ子（じつは男性）が実演していくという「性の入れ替え」が笑いのポイントとなっていた。4番手のフレディ・ワンチューリーはフレディ・マーキュリーの「ものまね」なのだが、クイーンのナンバー「ボヘミアン・ラプソディ」を自らが演奏するキーボード一台で独演するというけっこう高度なネタであった。つづくイカリング隼人はテレビ番組「おかあさんといっしょ」を幼児ではなく高齢者を登場させるとどうなるか、という「シチュエーション・コント」である。6番手のがむしゃらは、映像作品から登場人物が抜け出してあまかんに登場するというつくりで、リアルとヴァーチャルのシンクロは実際の結婚式披露宴でも用いられる手法であろう。会場に結集したメンバーが舞台上「オタ芸」を踊るところが笑いのポイントとなっていた。7番手のだんしんぐはスティーブ・ジョブズの「ものまね」でスライド・ショーのレクチャーをする前半と、パフューム里志の「パロディ」で踊る後半とで芸風の幅を見せている。続いてチームTEPPANは、豊年祭の踊り集団が再結成するという「コント」

ワンが一番の笑い

と、内部ユニットのワンジーの「しゃべくり漫才」との多重構成で、これも演目としては凝ったつくりとなっている。いちごみるくは第6回の時と同じく「キャラかぶり」を3人のフレディ・マーキュリーで演じている⁽¹¹⁾。10番目のさでくまさぶろうは第2回が初登場であり、逆に考えれば第6回はその再来であったことがわかる。ネタも「佐大熊に生まれて」、「ツバシャをください」、「帰れアフリカへ」など、佐大熊に関する替え歌で「楽屋おち」を狙った芸である。MIZATOOは曲に合わせてコミカルな踊りを披露する「創作ダンス」で笑いを誘い、最後のパフューム里志はいつもの完コピ・ダンスで大会をしめている。

以上、第1回と第2回のY-1を概観したが、次第に余興芸コンテストとしての体裁を整えていく様子が見えてくる。演し物も結婚式披露宴という場に特化して演じられるものから、披露宴でなくても演じられる練り込まれた芸まで、幅広く演じられるようになってきている。

なお、第3回から第5回は映像資料が入手できておらず、じっさいにどのような演し物が演じられたのかをまとめることは今後の課題である。ここにはその出場者と優勝者を記録として表5にまとめるに留めておく。出場者の顔ぶれをみただけでも、イカリング隼人、ワンジー、いちごみるく、パフューム里志、柳家本舗、東みつひこなど、いわゆる「常連組」が定着してきていることが確認できる。

表 5：Y-1 グランプリ第 3 回～第 5 回の出演者
(◎は優勝者)

第 3 回 Y-1 グランプリ 2013.1.27 (会場：あまかん)	出場者 (順不同) 東みつひこ (徳之島)、外山シンジ (沖永良部島)、 和也 Shigeyama (喜界島)、ワンジー (龍郷)、 シゲと愉快的仲間たち (笠利)、柳家本舗 (瀬戸内)、 COMING SOON (大和)、イカリング隼人 (宇検)、 渡ハブミチ (宇検)、パフューム里志 (住用)、 MIZATOO (住用)、きのうゆうじ (名瀬)、 ◎いちごみるく (名瀬)
第 4 回 Y-1 グランプリ 2014.1.26 (会場：あまかん)	出場者 (順不同) イカリング隼人 (宇検)、プチ 2 剛、岡村学、 いちごみるく (名瀬)、きのうゆうじ (名瀬)、 パフューム里志ばみゅばみゅ (住用)、 ワンジー (龍郷)、プープーシスターズ (名瀬)、 MIZATOO (住用)、ゆわんか MAN (大和)、 ◎大島地区消防組合名瀬消防署 (名瀬)、 猿興研究学部 (瀬戸内)、東みつひこ (徳之島)
第 5 回 Y-1 グランプリ 2015.6.21 (会場：あまかん)	出場者 (順不同) 今里好朗 (名瀬)、イカリング隼人 (宇検)、 ◎SMASH Brothers (宇検)、東みつひこ (徳之島)、 シゲとマサムネ (笠利)、きのうゆうじ (名瀬)、 ゆわんが MAN とよっちゃん (大和)、 いちごみるく (名瀬)、パフューム里志クリスタル (住用)、 ワンジー (龍郷)、MIZATOO (住用)、 猿興研究学部 (瀬戸内)

3. Y-1 をめぐる出来事の流れ

本節では、Y-1 グランプリが開催されるようになるまでの経緯を、Y-1 をとりまくさまざまな出来事との関連性を前提として、その流れを確認しておきたい。笑芸を中心とした余興イベ

ントとしての Y-1 は、お笑いイベント単独としてみるよりも、音楽施設の設置や島おこしのイベントなどとの関連性の観点から、地域の活性化を捉える視点を交えたほうが出来事として立体化する。具体的には表 6 のような出来事の流れをおさえておく必要がある。もっともここに示す出来事の流れは、[豊山 2012]、[麓 2014]、[加藤 2017] などの先行研究において、これまでもかなり論じられ、いわゆる定型ストーリーのようになっているふしもある。とりわけ [麓 2014] は、これらの事象において中心的役割を担ってきた当事者による論述であり、屋上屋を重ねることは避けるべきかもしれない。ただし、これらの先行研究においては重点は音楽活動に置かれているのに対して、本稿ではあくまでも余興笑芸に焦点をあてている。そして、音楽活動やラジオ放送などが活性化したことと相関関係が見いだされたり相乗効果があったことによって、Y-1 という余興イベントが活性化したという視点を明確にするためにも、上記の先行研究を要約的に概括しておくことも、あながち無駄ではないと考える⁽¹²⁾。以下、表 6 の年表に沿って、関連する出来事をまとめていく。

3-1 ライブハウス ASIVI の開業

ASIVI の正式名称は、ROADHOUSE ASIVI という。この名称は、前半部分の「ROADHOUSE」は開業時からの協力メンバーの親族がアメリカでのライブハウスの呼び名として紹介し

表 6 : Y-1 関連年表

1998.8	サーモン&ガーリック結成
1998.10	ライブハウス ASIVI 開業
2001.2	第 1 回夜ネヤ島ンチュリスベクチュ (ASIVI)
2001.11	第 2 回夜ネヤ島ンチュリスベクチュ (ASIVI)
2002.1	アーマイナープロジェクト設立 東京夜ネヤ島ンチュリスベクチュ (渋谷クラブクアトロ)
2002.2	元ちとせメジャーデビュー
2003.9	復帰50周年夜ネヤ島ンチュリスベクチュ (奄美パーク)
2004.11	NPO 法人ディ！設立
2007.5	あまみエフエム開局
2010.10	奄美豪雨災害時の120時間 (五日間) 連続放送
2011.6.12	第 1 回 Y-1 開催 (ASVI)
2011.12.30	第 2 回 Y-1 (あまかん)
2013.1.27	第 3 回 Y-1 (あまかん)
2014.1.26	第 4 回 Y-1 (あまかん)
2015.6.21	第 5 回 Y-1 (あまかん)
2017.6.18	第 6 回 Y-1 (あまかん)

たことで採用され、後半の「ASIVI」は島言葉の「唄あしび」から採られたそうである。ステージがあり、音響・照明などが常設された、奄美で初のライブスペースであり、麓憲吾によって1998年にオープンした。

情報誌『マチイロマガジン』51号 (2019年2月28日、特定非

営利活動法人まち色 まち色編集局発行)はASIVI20周年を記念して「ASIVIの軌跡 奄美の音楽シーンを創り続けてきた20年」と題する特集を組んでいる。そこにはASIVIの20年の足跡が年表としてまとめられており、1998年6月には「島にライブハウスを作ること为目标にBAR 2TONETRACKをオープン」[まち色編集局 2019、Timeline (ページ番号なし)]とある。また麓憲吾のあいさつ文には、「私たちの音楽・イベント活動の源泉は、遡ること約25年前、屋仁川通り伊東隆吉オーナーの経営する「BAR FESTIVAL」(現むちゃかな)からムーブメントは始まりました」[まち色編集局 2019、Greeting (ページ番号なし)]と記されている。ようするにASIVIというライブハウスはいきなり出現したわけではなく、その胎動期といえるいくつかの施設をへて、いわば満を持してオープンしたのであった。

今でこそ奄美唯一の専門的ライブハウスとして島民にひろく認知されているが、発足当時は「「やれるのかいやあ〜」っていうのはあったかも。周りの声も「続くのかいやあ〜」と不安視してた」[まち色編集局 2019、Dialogue (ページ番号なし)]というのが実情らしい。それでも、ビアホール「ニコル」の「店譲ります」という張り紙をみて譲り受け、内装など自分たちで作業してまさに手作りしていったのだという。オープン後、1999年には島外より初のアーティストとして遠藤ミチロウを迎えてライブを行い、2001年には「夜ネヤ島ンチュリスペクチュ」(後述)が開催され、翌2002年にはライブハウスの経営や音楽イベント

の企画開催をおこなうため、有限会社アーマイナープロジェクトが法人登録されている。そして同年、ASIVI が全面リニューアルされるころにはかなり安定した活動がなされるようになった。そして麓は「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」の野外イベントを企画したり、インディーズレーベルを立ち上げたり、さらにはFM ラジオ局の開設へと挑戦を拡大していくのである。

3-2 サーモン&ガーリックの登場

サーモン&ガーリックは、島唄漫談ユニットのコンセプトで活動するパフォーマーであり、ボーカル&三味線の新元一文（サーモン）とボーカル&コンガの城平一（ガーリック）のコンビであるが、バンドの「サーモン&ガーリック with アニョ」として活動するときには、ベースの松田巧とドラムの麓憲吾が加わる。このメンバーでCD『サーモン&ガーリックのハブマンショー』を2005年に、『サーモン&ガーリックのハブマンショー2』を2019年に ASIVI のインディーズレーベルである「ディ！レコード」からリリースしており、2008年にはフジロックフェスティバルにも出演するなど、単なるローカルバンドの域を超える活動範囲を持っている。

情報誌『ホライズン』では、次のように紹介されている。「二人は小中高を通して先輩後輩。目立ちたがり屋で人を笑わすのが大好きな二人が、共通の先輩の結婚式の余興で島唄お笑いコンビを組むことに。一曲まるごと歌えなかったものの、アドリ

ワンが一番の笑い

ブの舞台はバカ受け。以来、奄美市役所職員の傍ら、三味線とボンゴを片手に歌うシマグチ漫談で老若男女を笑いの渦に巻き込んでいる。現在、島唄のレパートリーは10曲。島で生きる面白さを臨場感豊かに発信している」。また記事で、本人も、「島唄の背景にある深さはものすごいものがあるから、島唄に興味のない若い人にもなんとか伝えたいと思ってやっています。まずは、笑いで気を引いて」と発言している〔ホライゾン編集室2006:1〕。奄美民謡の大家・清正芳計と出会って三味線演奏に傾倒していった経緯からも、民謡演奏をバックボーンとしてもつことは明らかである。そのような音楽の世界と笑いの世界を架橋した存在であるサーモン&ガーリックは、Y-1 エンジャのプロトタイプとして捉えることも可能であろう。

たとえば、「あさばな節」という有名な奄美民謡がある。

ハレー唄の打ちじゃしに　ハレーあさばなはやり歌
ハレー稀れ稀れなきゃば拝でい　なまなきゃ拝めば　いつ
拝むかい

という歌詞で、宴の席の一等最初に歌われその集まりを祝福するようなめでたい歌である。この歌詞の合間には「島よ一番村一番よ」という合いの手が入るが、CD『サーモン&ガーリックのハブマンショー』に収録された「余興？　ボーナストラック（日本限定）」という曲では、それを「ワンが一番、ナンや二番

よ」と替え歌にしてサーモンが歌うと、以後ガーリックとのかけ合いとなり、「ワンが一番だよ」、「あらんあらんどー、ワンが一番どー」、「ワンがあらん、アラン・ドロンどー」と茶化していく様子を聞くことができる。

この「あさばな節」のアレンジは、サーモン&ガーリックのテーマ曲のように演奏されることが多く、タイトルも「シアワセ、ハッピー」としてCD『サーモン&ガーリックのハブマンショー』の1曲目に収録されている。歌詞自体をガラリと変えた替え歌であり、

ハレー しあわせ ハッピー フォーエバー
夜ネヤ島ンチュリスpekチュよー

と歌い、イベント「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」における主題歌的な楽曲となったのである。またCD『サーモン&ガーリックのハブマンショー2』の冒頭に収録された「あさばな節〜アメグレ節」という曲は、祝い事の席でサーモン&ガーリックが演奏を披露するというシチュエーションで収録されているが、前半は「あさばな節」の一節を歌い、後半では親縁関係にあるもうひとつの民謡「長あさばな節」⁽¹³⁾の歌詞を歌い出す。

ワンが一番の笑い

今日ぬほこらしやや いつよりもまさり
いつも今日ぬごとに あらしたばれ

ところがこの曲のメロディを会衆者たちは誰も知らず、この歌はなんだ？とささやきあうという展開になる。じつは、コード進行が似通っていることから（あるいはあえて似せるようなアレンジを施して）、「あさばな節」を次第に「Amazing Grace」⁽¹⁴⁾ にスライドさせて歌っているのである。

サーモン&ガーリックはこのように、島唄の歌詞だけでなくメロディもアレンジして遊び楽しむことに長けており、音楽と笑いをリンクさせる側面はY-1を考える上でも重要である。CD『サーモン&ガーリックのハブマンショー』、『サーモン&ガーリックのハブマンショー2』自体、スネークマンショー⁽¹⁵⁾を換骨奪胎した側面があり、楽曲と音声コントを交互に収録していくスタイルがとられている⁽¹⁶⁾。

3-3 「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」の開催

サーモン&ガーリックのサーモンこと新元一文は、島唄と出会うことによって、ある意味「自文化カルチャーショック」とでもいうべき衝撃を受けたという。自分の生まれ育った島の民謡であるのに、その素晴らしさにそれまでは気づかなかったのである。しかしそれは新元一人ではなく、多くの島民が共通して持つ経験である。「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」というライ

イベントが企画され開催の運びにいたるには、この「自文化の再発見」がモチベーションとなっている。「ライブハウスを立ち上げた麓憲吾と相談して「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」(今夜は島人を尊敬しようよ)というイベントを立ち上げたのが、2001年2月。大島紬や奄美の自然や文化・観光に携わる人、デビュー前の元ちとせや朝崎郁恵さんらも駆けつけてくれて、すごい盛り上がりだった」[ホライゾン編集室2006:1]と新元一文は語っている。

豊山宗洋と加藤晴明の整理によると、夜ネヤは2001年2月を皮切りに、2001年11月(第2回)、2002年1月(東京渋谷クラブクアトロ)、2002年8月(第3回)、2002年12月(第4回)、2003年4月(第5回)、2003年9月(復帰50周年 in 奄美パーク)、2005年6月(第6回)、2005年7月(りゅうゆう館)、2005年8月(東京代々木ブラージュ)、2006年10月(第7回)、2007年11月(第8回)、2008年4月(東京全労済ホール)、2009年7月(奄美パーク)、2010年5月(東京全労済ホール)、2013年10月(復帰60周年 in 奄美パーク)、2013年11月(鹿児島天文館)、2014年6月(奄美パーク)と、数多く開催されている。そして通常はASIVIが会場となるが、それにとどまらず屋外の奄美パークや東京、鹿児島などでも開催されている[豊山2012、加藤2017]。この開催回数の多さは、イベントのタイトルどおり、島民自身が自らを誇らしく思う気概が活発化した証左でもある。そしてもう一点、野外イベントや島外での開催などに積極的に打って

出ることの有効性も物語っている。加藤が言うように、「仲間の楽しみという音楽活動から、外に向けたアピールを意識した、音楽だけではなく、奄美そのものを発信する意図をもったメディア事業・文化装置へと展開してきた」[加藤2017:260] のが「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」であったということができよう。

ここで先の新元の発言のなかで言及されていた元ちとせについてふれておきたい。デビューシングル「ワダツミの木」がオリコンシングルチャート1位を獲得し一気に音楽シーンにその存在感を示した元ちとせは、インディーズデビューが2001年3月、メジャーデビューが2002年2月である。先の新元の発言中「デビュー前の元ちとせ」とあるのは、インディーズデビューのことであるが、奇しくも東京夜ネヤ in 渋谷クラブクアトロが開催された10日後には今度はメジャーデビューしている。夜ネヤと元ちとせの歩みは軌を一にするところがある。それは何かというと、奄美島ツチュであることに誇りを持つというアイデンティティの発現のされかたであり、さらにいえば「奄美そのものを発信する」というその存在のあり方自体でもある。麓憲吾が紹介するある奄美出身者のエピソードは、それを如実に物語っている。「当時、外勤時に車を運転している際のこと、カーラジオからふと流れてきたワダツミの木とともに『奄美出身の元ちとせです!』というメッセージが胸に刺さりました。私は路肩に車を止めて、なぜか涙が止めどなくあふれ出てきたんです。実は上京して30年間、周りの誰一人に対しても奄美出身だ

ということを黙っていましたが、その翌日からそれが言えるようになったんです・・・」[麓2014:56]。

元ちとせ自身、このことは意識しているようで、次のような発言もみられる。「当時は奄美の人も、自分が奄美出身ということが言えなかったんです。ちょっと恥ずかしいという想いがあることと、「奄美ってどこ？」って言われて、説明するのが面倒くさかったそうです。でも私は全然そういうことを考えたことがなくて、デビューが決まって東京に出てきてから、奄美の人がそういう風に思っているということを知って、それで、島の人達が堂々と奄美大島出身だと言える土台を作ろうと開催したのが『夜ネヤ島ンチュリスpekチュ』でした」⁽¹⁷⁾。元自身は奄美出身のインフェリオリティ・コンプレックスに対して無頓着であり、かといってあえて奄美出身を強調するような無理な気負いも感じない、ごく自然体として島唄ブレンドのポップスという独自のジャンルを開拓していった。その飄々とした存在感が、島出身者のインフェリオリティ・コンプレックスを打ち破ることになったのかもしれない。そういう元のスタンスにあっては、「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」はじつにポジティブに意義づけられている。奄美での音楽活動においてとりわけ印象的だった出来事として、「夜ネヤ」をあげているのである。「『夜ネヤシマンチュリスpekチュ』というイベントを奄美パークでやった時、島の人達が活動してきたものがあれだけ集結して、それぞれの島に誇りを持っているよっていうことを意識確認みたいなこと

ワンが一番の笑い

ができたこと。別の集落で育ち、その同じ魂の熱さは言葉にも形にもしきれなかったでしょうけど、みんな言葉には出さない目には見えないもので感じてきたことが、手に取るようにわかった瞬間だったのは今でもすごく印象深く思ってますね」⁽¹⁸⁾。

本稿の主題である余興笑芸の観点からみれば、この「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」というイベントは、「公民館の余興」といわれる各集落の青年団による演芸をステージアーツを駆使したエンターテインメントに仕立て上げるという効果があったことが推察される。じっさいに「夜ネヤ」のステージでは、八月踊りや余興が演じられたといい、この経験をもとにグランプリ形式の余興大会が形づくられていったのである。

3-4 あまみエフエムの放送開始

先の元ちとせの発言にあった奄美パークでの「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」とは、2003年の9月に開催された夜ネヤをさす。奄美パークとは、旧奄美空港跡地に開園された奄美群島観光拠点施設である。展示室を持つ奄美の郷と、画家・田中一村を記念する美術館という室内施設のほか、イベント広場もあり、敷地面積は7万7千平方メートルである。ここに野外ステージを組んで、6000人ももの観客を集めた一大イベントが夜ネヤ in 奄美パークであった。主催者の麓憲吾は個人的に莫大な借金をしながらもこのイベントを成功させたのだが、それは開催年の2003年が奄美群島の日本復帰50周年だったからである。そしてその

10年後、2013年の復帰60周年の際にも、やはり奄美パークで夜ネヤは開催されている。そのような節目に島人を尊敬しよう、島人であることに誇りを持とうといったメッセージを持つイベントを開催することは、それだけで十分に意味のあることだった。そして、この復帰60周年の2013年には、Y-1 も「復帰60周年記念大会」が開催されているという点においても、夜ネヤと Y-1 の共鳴関係を指摘できる。夜ネヤが島唄という音楽で島人アイデンティティを強く認識させるのと同様に、Y-1 は笑いと芸でその効用を生み出すのである。

もっとも、このような巨大イベントを成功させるいっぽうで、そのような非日常的な感化の手段とは対極の日常的な感化の手段も必要ではないかという思いが麓のなかで大きくなっていったという。麓自身のことばによれば、「この経験を通して、イベントというある意味「祭り」として非日常での意識に対するパフォーマンスと、日々の放送という日常での無意識に対するムーブメントという二つの働きかけを区別して認識する」ようになり、この認識から、「「島ツチュが島のことを知ることから始める」ということがテーマとなります。そのために日常的な情報伝達というツールが奄美にも必要だと感じました」[麓2014:59－60] ということになる。麓は島外からもたらされる情報が「一方向で雨のように降り注ぐような形」であるのに対して、島の中で島人によってもたらされるような循環される情報を「井戸や泉のようにウチから湧き出るもの」として対比させて考え、

「島の情報の循環・感化のような日常スタイルが構築する伝達手段は？」と模索している中で「ラジオ」という音声媒体での情報伝達がよいのではないか」〔麓2014:60〕と気づいたという。

その思いを実現させるため、2004年にはNPO 法人ディを設立し、これを核として、2007年5月1日、あまみエフエムの開局にいたる。この経緯も先行研究〔豊山2012、加藤2017〕にはたいへん詳しく、ここでは多くはくり返さないが、一点着目しておきたいのは、上記のラジオ局開局の経緯で作成されたパンフレットの表紙に記された「ディ！ 声を出そう。あなたは、本土の放送局だけで満足ですか？」というフレーズである。オルタナティブ・メディアとしての意気込みを感じさせるが、麓自身としては「島の人たちに島を伝える」という基本コンセプトを表現したものだったのかもしれない。「本土の放送局」に対して必ずしも対抗意識をもっているわけではない。ラジオ局開局後は、「ディ！」という大きなロゴの下に書かれているのは、「シマツチュの、シマツチュによる、シマツチュのためのラジオ」というフレーズであり、ややマイルドになっている。ちなみに「ディ！」とは奄美方言で「さあ！」とか「ほらっ！」といったかけ声に近い意味があるそうだが、あまみエフエムの別名「ディ！ウェイヴ！」にも採用されている。また、サーモン&ガーリックには「ディ！」という曲があるが、これは奄美民謡「すばやど節」を下敷きにしながらリズムを強調したアレンジ曲であり、イベントや集会などで会場を盛り上げるときに演奏する

定番ナンバーとなっている。

加藤晴明の整理によると、あまみエフエムの個性は、(1)島口・島文化発信ラジオ、(2)〈奄美うた〉の文化発信ラジオ、(3)イベント発信ラジオに集約されるが〔加藤2017:189-198〕、このうちとくに Y-1 に関連するのは (3) イベント発信ラジオとしての個性であろう。じっさいに Y-1 グランプリはあまみエフエムやアーマイナープロジェクトの全面協力のもとに実施され、会場設営や案内なども彼らのマンパワーが存分に発揮される。もちろん情報発信として放送で Y-1 の開催がとりあげられることもあり、その点でもローカル FM 放送局の開局は Y-1 にとって大きな意味をもっている。

以上、本節では Y-1 に関連する出来事として、ASIVI の開業、サーモン&ガーリックの活動、夜ネヤ島ンチュリスpekチュの開催、あまみエフエムの放送開始をとりあげた。ごくかいつまんで総括すると、まず ASIVI の開業によって音楽だけではない奄美の文化発信のための拠点ができあがる。そこでサーモン&ガーリックという異才の島唄漫談ユニットが登場し、音楽と笑い（余興）をリンクするようなキャラクターとして活躍する。彼らの提唱ではじまった「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」は、形式的には音楽だけでなく広くステージパフォーマンスをイベント化するフォーマットを創出し、実質的には島人が自分たちの文化的コンテンツを再発見し、それを「かっこいい」、「おもしろい」とポジティブに意義づける契機となった。そしてあまみ

ワンが一番の笑い

エフエムの開局によって、非日常型とはまたちがった日常型の地元情報の内的環流が起こり、ラジオ放送のイベント発信力によって、Y-1 の呼び水的機能を果たした。地元情報の内的環流という点に関しては、Y-1 における「地産地 〈笑〉」のスタイルにも影響を及ぼしていることが推察される。

そしてまた、夜ネヤのようなイベントが非日常型、ラジオが日常型だとすれば、Y-1 のような余興コンテストはその中間、いわば「擬日常」とでも呼べるようなポジションを占めるのではないか。コンテスト形式のステージ・パフォーマンスという点では非日常であるが、「公民館の余興」といわれるような村落の集会で青年団が中心となっておこなわれる交流形態であることを考えるとむしろ日常の側面も強調されるからである。このように考えると、Y-1 は決して単独で唐突に始まったイベントであったわけではなく、文脈的必然性をともなって、始まるべくして始まったのだと考えることができる。

4. 予備的考察

本稿は、奄美大島で開催される Y-1 グランプリという余興コンテストの実態、またその開催までの経緯を概観しながら、奄美における笑芸の位置づけについて考えてきた。笑いという感覚・感性の分野にかかわる事象に関する文化人類学・民俗学の領域からのアプローチは決して多いとはいえず⁽¹⁹⁾、その主題

化・方法化をめぐることは今後本格的に取り組まなければならない課題である。たとえば、柳田國男が民俗学を体系化するにあたって考案した民俗資料の三部分類において、「実はこれこそ我々の学問の目的であって、あとの「一部」と「二部」の二つは、謂わばこれに達するための途中の階段のように考えている」[柳田1998:349 現代かなづかいに改変]とまで柳田をして言わしめ、民俗学研究の最終目標として掲げられたのが、第三部「心意現象」である。その研究内容には、「俗信」や「趣味・愛憎」、「死生観・靈魂観」、「心情感覚」などとならんで、「笑い」があげられている。そこでは、「笑の問題の如きも此章の題目としてよいと思う。…笑は原始の形では村の生活の重要な基礎になって居たと思われる。笑止とか恥辱とかいう觀念が、日本に於て殊に發達して居ることは、輕々と見過すわけには行かないのである。第三部門における研究を、魂魄思想や信仰問題に偏らせることは不可である」[柳田1998:192 現代かなづかいに改変]といった指摘がなされており、笑いに対して格別な意識と配慮を注いでいることがわかる⁽²⁰⁾。

そして民俗学的主題としての「心意現象」は、箭内匡の次の指摘に照らすと、文化人類学的主題としても共通することがわかる。「マリノフスキが述べた「現実の生の不可量部分」(imponderabilia of the actual life)とは…一体何を指す言葉なのか。これについてマリノフスキは、「家族生活」が読者にとって意味するものを思い出すように提案する。そこには「家族の雰囲気、愛

情や相互の関心、親しさにつきものの小さな偏愛やちょっとした反感などを表す、無数の小さな行為や心づかい」があるわけだが、そうしたものは家族についての規範的な記述によっては決して説明できないもの一つまり量ることのできないものである。…つまりマリノフスキは「不可量部分」という言葉によって、一つ一つの行為や気持ちの重さは微小であり、ほとんど取るに足らないが、しかしその微小なものの積み重ねは確かに重要な意味を持っていること、そしてそれこそが「人々の生の血肉部分」をなしているのだということを理論化しようとしたのであった」[箭内2018:47-48]。マリノフスキは文化人類学的方法を体系化するにあたって、(1)具体的統計資料の作成、(2)記録としての口碑文、(3)実生活の不可量部分の三点をあげていたが、これがいみじくも柳田國男の民俗資料の三部分類に符合する。すなわち(1)は第一部の有形文化(生活諸相、目の採集)、(2)が第二部の言語芸術(生活解説、耳の採集)、そして(3)が心意現象(生活意識、心の採集)に相当する。柳田ほど明示的ではないが、マリノフスキは実生活の不可量部分の具体的な例のひとつとして「村の焚き火の回りでの社交生活や会話の調子」[マリノフスキ2010:56]をあげており、そこには談笑や冗談、仲間内での「すべらない話」⁽²¹⁾の披露の仕合いなども含まれることを想定すると、何がおかしいのか、いかにして笑うかといった問題も、計量化できないが生活者の心のありようを見定める重要な手がかりとして対象化されうることは想像に難くない。

話を柳田國男にもどすと、彼が民俗学研究を方法化するにあたって「郷土生活研究採集手帖」というクエスチョネア集を用意したことは有名であるが、その中の項目「笑はない人がありますか」、「よく笑ふ癖のある人はありますか」等について、橋本裕之は詳しく論じている〔橋本2015〕。この奇妙な調査項目に対しては、対象社会の笑いを網羅的に採集することよりも、村における「笑わせ役」といった特異なキャラクターをとっかかりとして、その集団自体の記述をおこなう仕掛けとして着目したのではないか、という疑問符がつけられる。そもそも柳田國男の笑い論には優越者が劣敗者に対してしかける攻撃という色合いがかなり強いのだが、橋本はそのことに疑義を差し挟み、強者が弱者を笑うという一方向の笑いよりも、「笑いあう」という相互作用的な笑いに着目する。柳田が捨象したこの「笑いあう」という現象には、演者と観者、笑わせる役と笑う役などの区別を空無化し、むしろ両者が相対的に循環し合う様相が重要であるという。「彼らはだれでもが笑いだれでもが笑われる場から誕生、そして成長していったものと思われる」〔橋本2015:60-61〕というのが、この論文の副題に掲げられた「お笑い芸人」の原像という問いに対する帰結となっている。

笑い－笑われの一方向の関係から笑い合いの相互的關係へと
いう論点は、奄美の余興笑芸を考えるうえでも重要である。Y-1
の原型となっている結婚式披露宴や「公民館の余興」すなわち
敬老会や八月踊りの余興などにおいては、演者と観者、笑わせ

る役と笑う役などが明確に分離しているわけではない。コミュニティのメンバーが順繰りに演者となり、そして演者だった者は次には観者となり、という循環をくり返す。つまり笑い合いは、同時に「演じ合い」でもあるのだ。このような循環的な笑いの場においては、笑われることは柳田がいうような「被害」としての、あるいは「懲罰」としての意味合いは限りなく希薄化され⁽²²⁾、むしろ笑われることにおいて「ワンが一番」を競いさえるようなポジティブな意味づけが前景化する。このシステムを取り入れてイベントのスタイルに仕上げられたものがY-1グランプリだといえる。

この笑い合い＝演じ合いの順繰りシステムのベースになっているのは、奄美における個人が身につけるべき技芸に対する考え方であると思われる。奄美の技芸は一人前の人間が当然身につけるべき資質でありながら、専門化されることはまれで、アマチュアとしての立場で楽しむべきものとして捉えられていたという。そして宴席などで周囲の者から請われると一芸を惜しげもなく披露し、しかし自らを笑わせ役として固定化するのではなく、次の演者へと笑わせ役を譲るのもたしなみのうちとされたのである。ちょうど、仲間同士でカラオケを楽しむ際、マイクを独り占めするのは顰蹙もので、みんなが均等に歌えるよう、マイクを順繰りに回していくことが社会的に成熟したたしなみだと認識されることに似ていよう。

3節の最後に、Y-1を「擬日常」として位置づけたのは、非

日常のイベントと日常のラジオ放送のあいだに位置づけられるという議論の流れを受けてのものだった。しかしこのような笑い合いの日常的光景を引き合いに出して考えるならば、より「擬日常」としての意義も際だって捉えられるように思われる。つまりコミュニティのメンバーは、大ウケするかややウケであるかはともかく、少なくとも一人一芸を身につけていて、その芸を演じあい、そして笑い合うという笑いの循環をそもその土台としているということである。このような「擬日常」のインパクトを考える上で、「地産地〈笑〉」ということばは重要である。その土地で生まれ、その土地でウケる笑いというものは循環性のあるものだという意味と、演者が順繰りに芸を披露して行くという点での循環性に下支えされた笑いであるという意味が見いだされるからである。

この「地産地〈笑〉」の様態を掘り下げていくためには、今後の研究にあっては、日常の場でどのような笑いが生成されるかに着目した調査研究が必要であろう。とくに「公民館の余興」といわれる集落の青年団の演し物などは、まさに「地産」されるものであるにもかかわらず、ほとんど記録されることなく、集落によっては代々受け継がれていく場合もあるが、たいていの場合はそのとき限りであって再演されることもない。また逆に、記録したり継承したりして定型性にこだわると、笑いとしては成り立ちにくくなるのかもしれない。しかし Y-1 の余興コンテ

がおかれているので、それとバランスをとるためにも、日常のほうによりシフトした観点も取り入れる必要があるのではないかと考える。

もう一点考えたいのは、「公民館の余興」として島独自の笑いの表現形態があった一方で、Y-1の主催・運営にかかわる人びとも、サーモン&ガーリックのようなエンジャにしても、自己表現のコンテンツに「再会」するケースが多いということである。3-3では「自文化カルチャーショック」という言い回しを用いてこの再会に言及したが、ASIVIを開業した麓憲吾は、ライブハウスに招いた「内地」のアーティストから島の自然や文物について逆に教えられたといい、サモガリの新元一文は有名なウタシャに触発されて島唄の素晴らしさを再発見したという。つまり自文化は所与のものとして彼らの手中にあったわけではなく、再帰的に意識され獲得されたものだといえる。豊山宗洋は「本土のフィルターを通して奄美をみる」という表現を用いるが[豊山2012:23]、奄美島人のアイデンティティや誇りを確認するというポジティブな意義づけは、本稿3節のY-1関連事象の流れにおいても明確に見られた。ここでみられたことは、自文化についての肯定的な側面を（再）発見し、それを現代の自分の生活のなかで有意義なたちでアレンジしながら位置づけ直すという操作であった。

このような文化的自己表象のプロセスは、「自文化の自分化」と呼べるだろう。ふつう、カスタマイズしながら自己に取り込

むのは「異文化」ではないかと思われがちであるが、文化の脱領域化が進行するグローバリゼーション状況下において、あるローカルティに文化的実態が一对一对応していると考えるのは無理であろう。むしろ自文化といわれるものでも、あらためて当人が「かっこいい」、「おもしろい」と思えるようカスタマイズしながら使い勝手のよい状態にもっていくような自分化のプロセスこそ、現代世界において文化を捉えるためにおさえておきたいポイントであろう。

なにより、笑いを主題にした本稿が、まったく笑いを提供しないのも味気ないもので、なんとか地口で締めくくりたかったのである。

【謝辞】

本研究は、下記の JSPS 科学研究費補助金の助成を受けた。

- JP16K02345 「奄美における文化の〈メディア媒介的な伝承・創生〉とアイデンティティ再生の研究」(基盤研究(C)、研究代表者:加藤晴明、2016-2019)
- JP19K00230 「奄美における芸能文化の〈メディア媒介的復興〉と自尊意識再生の文化生産論的研究」(基盤研究(C)、研究代表者:加藤晴明、2019-継続中)

【注】

- (1) 吉本興業が主催し、テレビ朝日系で年に1度放送される漫才コンテスト。
- (2) 吉本興業が主催し、関西テレビ・フジテレビ共同制作のテレビ番組として放送されるピン芸人コンテスト。
- (3) <https://amamikke.com/8958/> (2020年10月30日最終参照)
- (4) <https://ritokey.com/article/report/1074> (2020年10月30日最終参照)。ブログ文体の改行を「／」で示した。
- (5) <https://ritokey.com/article/report/1074> (2020年10月30日最終参照)。「／」の用法は注4に同じ。なお、ここで言及されている「安田さん」とは、Y-1 グランプリを主催する発起人である。「本土復帰60周年」の意味については後に論じる。
- (6) 安田祐樹へのインタビューについては、別稿にゆずる。なお、本稿は論文という性格上、人物名の敬称略を一貫させる。
- (7) じつは2014年に別の研究課題で奄美大島に滞在した際、たまたま第4回Y-1に参加したが、そのときは単なる見物程度のもので、観察調査といえるものではなかった。したがってとりたてて記録のようなものとはとっていなかったのが残念である。
- (8) 松鶴家千とせという芸名をもつ芸人は実在するが、「しょかくやちとせ」がこの字をあてるかどうかは不明である。
- (9) もっとも、奄美では芸によるプロ化はあまり意識されないといわれているが、このこと自体興味深い問題でもあるので、別のところであらためて論じたい。
- (10) この「緊張と緩和」が笑いの基底部分にかなり共通してみられるという指摘で有名なのは桂枝雀である〔桂枝雀1993〕。
- (11) 映画「ボヘミアン・ラブソディ」が公開され世界的にクイーンのリバイバル・ブームが起きたのは2018年であり、それ以降なら

フレディ・マーキュリーがフィーチャーされた演目が多いのもわかるが、なぜか2011年の時点で奄美で人気が高まったのかは、単なる偶然であろうか。気になるところである。

- (12) 本節に関するさまざまな出来事の当事者・麓憲吾へのインタビューもおこなっているが、紙数の関係上、ここでは「要約的に概括」するにとどめる。インタビューについては別稿にゆずる。
- (13) この「長あさばな節」と「あさばな節」との民謡研究上の異同についての詳細な分析については、小川学夫「奄美民謡「あさばな節」再考」[小川2001]という論文に詳しく述べられている。
- (14) イギリス人牧師が作詞し、アメリカ合衆国でポピュラーとして愛唱される賛美歌。エルビス・プレスリーやアレサ・フランクリン、日本では本田美奈子による歌唱でよく知られている。
- (15) 1970年代に活躍した桑原茂一、小林克也、伊武雅刀らによるコントユニット。YMO とのコラボにより、楽曲と音声コントを混合させたアルバムを発表して人気を博した。
- (16) これらのCD に収録されたサモガリの島グチ・コントの笑いについては、もう少し深入りして考える必要があるが、紙数の関係上、稿をあらためたい。
- (17) <https://news.yahoo.co.jp/byline/tanakahisakatsu/20160815-00061150/> (2020年10月30日最終閲覧)
- (18) https://amami-time.com/cat_topic/1264/2/ (2020年10月30日最終閲覧)
- (19) 笑いに関する先行研究の検討は、いずれ徹底しておこなわなければならないが、ここでは三つだけあげておく。谷泰『笑いの本地、笑いの本願』は、コミュニケーション論の立場から、笑いについて対面的な日常会話のなかに位置づけて論じている[谷2004]。川田順造『人類学者の落語論』は、専門の口頭伝承論を

バックグラウンドとして、自らの寄席体験などを記述している。落語という特定ジャンルの笑いであるが、演技論などにも一部触れている〔川田2020〕。関一敏「祝う・呪う・笑う」は短いながら、笑いと言いの関係などにもふれており、筆者自身のこれまでの呪術研究との関連性などの観点からも触発される〔関2004〕。

- (20) 民俗学的主題としての「笑い」に関する柳田國男の思考にはついていくぶんかの幅があるようで、これについても別のところで精査が必要かもしれない。ひとつは「何にしても笑いは一つの攻撃方法である」〔柳田1979:29〕という指摘であり、柳田の笑い論の核となる思考であるが、ここから関連して、「笑われまいとする努力が、今日の道徳律を打ち立て、また多くの窮屈なる慣習法を作っている」〔柳田1979:30〕という指摘になると、少し論潮も変化してくるようである。これをさらに展開させると、「笑いの教育」論になることは広く知られている。以下、備忘録的に引用しておく。「老人などの口数の多い者は、稀にはわざと手本になるような好い若い者の言行を、誉めるような話をして聴かせることもあったが、他の大部分は消極的方法で、何か一人が過失を犯したときに訓戒する。つまりは群から逸出する者を、防ぐような計りごとを主として居た。その訓戒が又かなり奇抜なものであった。笑の教育と自分たちは之を名づけて居るが、一般に日本の社会では、笑というものが特によく利用せられていた。我々の笑は複雑にして又古風であった。それを巧みに訓育に利用していたのである。その必要は普通に共同労作の上に現われる。忙しい際だから諄々と説き聴かすというふうなことは少なく、大抵は短くして気の利いた、笑わずには居られぬ文句を以て、欠点のある者を批評すると、あと暫くはその者一人が皆から顔を見られ、何とも言い様のない淋しい状態に陥る。殊に男女が共に居る場合、それが是

から配偶の選択をしなければならぬとき、大いなる損害とも苦痛ともなったのである」[柳田1963:442 現代かなづかいに改変]。

(21) フジテレビ系列で放送されるトークバラエティ番組で、正式名称は「人志松本のすべらない話」。だれもがもっているウケ話を芸人がしゃべっていく形式で、お笑い芸人の松本人志がフォーマット化した。ここではテレビ番組そのものではないが、仲間が集まって順にウケ話を披露し合っていくようなくつろぎの時間が、「村の焚き火の回り」において時として展開することを想定している。

(22) 「そんなことをしたら人に笑われますよ」という訓育の仕方は、たしかに笑いの教育的効果としてあるのかもしれない。これに類して、関西地方の一部、しかも特定の時代のみのことだったのかもしれないが、筆者の回りでは、学校でいつもアホなことばかりやっている者に対して、「お前、吉本いけ」というたしなめ方があった。これはむろん吉本興業のことをさしているが、そんなアホなことばかりやっている奴はお笑い芸人にでもなってしまえ、といった軽蔑の表現と言うより、ある種、相手の存在を認める賞賛の言辞としても聞こえたのは不思議であった。笑われるということが必ずしもダメージとして意義づけられない地域性というものもあるのかもしれないが、奄美地方においても、人に笑われるような芸を身につけてこそ一人前という感覚があるように思われる。

【参照文献】

小川学夫 2001 「奄美民謡「あさばな節」再考 I 型歌唱形式から II 型歌唱形式へ」『地域・人間・科学』第 5 号：87-119

- 桂枝雀 1993 『らくご DE 枝雀』 筑摩書房
- 加藤晴明 2017 『奄美文化の近現代史 ―生成・発展の地域メディア学―』 南方新社
- 川田順造 2020 『人類学者の落語論』 青土社
- 関一敏 2004 「祝う・呪う・笑う」『岩波講座宗教5 言語と身体：聖なるものの場と媒体』 岩波書店
- 谷泰 2004 『笑いの本地、笑いの本願―無知の知のコミュニケーション』 以文社
- 豊山宗洋 2012 「奄美の島おこしにおける組織づくりの研究 ―ライブ活動からコミュニティへ―」『大阪商業大学論集』第7巻第3号（通号163号）：23-36
- 橋本裕之 2015 『芸能的思考』 森話社
- 麓憲吾 2014 「「あまみエフエム」開局までの道のりとその役割：島のアイデンティティを形成するコミュニティ・メディア」『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報』11: 56-62
- ホライゾン編集室 2006 『ホライゾン』24号、奄美群島観光連盟
- まち色編集局 2019 『マチイロマガジン』51号、特定非営利活動法人まち色
- マリノフスキ 2010 『西太平洋の遠洋航海者』 増田義郎訳、講談社
- 箭内匡 2018 『イメージの人類学』 せりか書房
- 柳田國男 1963 「平凡と非凡」『定本柳田國男集 24巻』 筑摩書房
- 1979 『不幸なる芸術・笑の本願』 岩波書店
- 1998 『柳田國男全集8』 筑摩書房